

# 名建築物を支えた 焼き物のまち

開拓使は、大規模工場と倉庫の建設用として、また寒冷地の建物として、企業にれんが建築を奨励した。これにより明治から大正10年代にかけて、れんが建築が道内に普及した。これは本州も同様であり、明治政府の技術工廠（特に三井、三菱系）により、産業革命期のイギリスれんが建築技術が導入されたことが大きく関与した。

明治初期から全国的にれんが工場やれんが建造物の建設が進められ、北海道では函館、旭川、空知、網走、十勝、名寄、小樽、岩内、根室、札幌、江別で工場が興った。この時期はよい粘土を産する地方と集治監に工場が置かれるという特徴があり、この頃の原始的れんが焼きが典型的労働集約型産業として、廉価な労働力を求めたといえる。

明治期のれんが工場は小規模で、陶器焼き転用の「登窯」が中心であったが、そのれんがで開拓使倉庫やニシン場倉庫、大規模なものとして北海道庁舎、札幌ビール第1、2工場、帝国製麻札幌工場、五番館、北海道鉄道旭川工場、小樽手宮機関庫、函館郵便局庁舎などの名れんが建築が生まれた。これらは、帝国製麻、五番館を除き現存しており、れんが建築の優秀さが分かる。登窯には北炭の両登窯など、大規模・大量生産が可能なものもあった。

こうした大型の庁舎や工場施設、倉庫はすべて、明治初中期では壁を極端に厚く積み上げる方法で

建てられ、明治後期では木骨（木芯）にれんがを張りつけることにより重量を軽減し、壁材の強度で大型建物の全体を支えた。

1888（明治21）年建造の札幌ビール第1工場（現在のサッポロファクトリー）や1901（明治34）年の第2工場（現在のサッポロビール園）、1907（明治40）年建造の北海道庁は、れんが壁の厚さが70cmにも及んでおり、この大きさの建物をれんがだけで支える大変さが理解できる。当時の北海道庁舎を建造するだけでも250万個のれんが素材をあらかじめ用意しなければならず、また、イギリス積み、フランス積み、オランダ積み、ドイツ積みといわれるような意匠的に複雑な技法をれんが積みの職人が競ったことから、れんが建築は歴史的で芸術作品としての価値は高いが、多数の大型建物を短期間で建設することには向かず、技術的な過渡期であった。

大正期以降、道内のれんが製造の中心は全道一の粘土、陶土産地帯である野幌周辺に移り、製造方式も連続式多量生産の最新式「 Hoffman 輪環窯」となった。野幌には9工場、白石（道庁赤れんがの供給で有名）、月寒に6工場の計15工場が発達し、道内最大のれんが製造地帯を形成した。北炭もここに専用工場を持ち、れんが造りの独特な炭鉱建築を多数建造した。これらの工場は商店、民家の建材用れんがのほか、土管、煙突も生産し、